

第162回 鶴見大学図書館源氏物語研究所貴重書展

紫式部

史実と伝説



● 展示構成と主な展示品

「Ⅰ」 歴史上の紫式部

古事談 「丹鶴叢書」

俊頼髓脳 (岸本由豆流旧蔵)

源氏物語 「江戸前期」 写一紫式部集 「家集の内」

新勅撰和歌集 近衛尚通写

紫式部日記釈一紫式部日記傍注

栄花物語 (絵入抄出本) 一校正栄花物語系図 (与謝野鉄幹・晶子旧蔵) 等

「Ⅱ」 伝説化する紫式部

源氏表白一新勅撰和歌集 伝後伏見院筆

白氏長慶集 明銅活字本一続世継 木活字本等



2025
1.21 Tue. ▶▶▶▶▶ 2.20 Thu.

● 鶴見大学図書館1階エントランスホール ● 入場無料

● 月曜～金曜 8:50-21:00 土曜: 8:50-18:00 日曜・祝日: 閉館

鶴見大学図書館 [交通] J R 鶴見駅より徒歩 10 分・京急鶴見駅より徒歩 15 分

■ <https://www.tsurumi-u.ac.jp/site/library-official/>

■ https://twitter.com/tsurumiuniv_lib



ごあいさつ

あけましておめでとうございます。新春の貴重書展は源氏物語研究所が担当しています。今回は「紫式部—史実と伝説—」と題しました。昨今、ドラマの影響もあり、紫式部への関心が高まっています。果たして実際の紫式部はどのような存在で、どのような人生を歩んだのでしょうか。

もともと、1000 年以上も前に生きていた人の生涯など、現代の我々には知る由もありません。その手がかりとなるのが書物です。紫式部は『紫式部日記』や『紫式部集』を遺し、さらに『栄花物語』などの後代の文献にもその名が見えます。しかし、いずれも作者自筆本は現存せず、これらの作品は長らく手書きで写され伝わってきました。そのため、書写のたびに書き間違いなどが生じたほか、何らかの意図によって内容が書き換えられる場合もありました。つまり、現代の我々が目にできる『紫式部日記』なり『紫式部集』なりは、そうした大小の錯誤や改変を含んでいるはずなのです。したがって、紫式部について文献から知るためには、前段階として、現存する書物に幅広く目を通し、それぞれの特徴や信頼性などを調査する必要があります。源氏物語研究所が『源氏物語』とそれに関連する古典籍の蒐集に尽力しているのも、そのためです。

今回展示できたのはさまざまな文献に記された紫式部の情報の一部に過ぎませんが、ひとつひとつ意匠を凝らした書物の素晴らしさとともにお楽しみください。

2025 年 1 月 源氏物語研究所

展示品リスト

- | | |
|--|---|
| 1、古事談 袋綴 6 冊 〔江戸末期〕刊
* 丹鶴叢書 * 勝海舟旧蔵 | 8、校正栄花物語系図 袋綴 1 冊 天保 3 年(1832)
序刊 * 与謝野鉄幹・晶子旧蔵 |
| 2、俊頼口伝 袋綴 1 冊 〔江戸中期〕写
* 寿永 2 年顕昭奥書本 * 岸本由豆流旧蔵 | 参考 3、勅撰作者部類 袋綴 3 冊
元文 5 年(1740)写 * 源政〔完〕筆 |
| 3、紫式部集 袋綴 1 冊 寛文 4 年(1664)写
* 「家集」10 冊のうち | 9、栄花物語 綴葉装 40 帖 〔江戸前期〕写
* 調度本 |
| 4、紫式部日記傍註 袋綴 2 冊 〔明治前期〕刊
* 文政 4 年(1821)刊の後印 | 10、栄花物語 袋綴 21 冊 明暦 2 年(1656)刊 |
| 参考 1、源氏物語 綴葉装 47 帖 〔江戸前期〕写 | 11、源氏表白 卷子装 1 軸 〔江戸中期〕写 |
| 5、紫式部日記釈 袋綴 4 冊 〔明治〕刊
* 天保 4 年(1833)序刊の後印 | 12、新勅撰和歌集 綴葉装 1 帖(巻 1～10 存)
〔鎌倉後期〕写 * 伝後伏見院筆 |
| 参考 2、新勅撰和歌集 綴葉装 1 帖
永正 7 年(1510)写 * 近衛尚通筆 | 参考 4、白氏長慶集 袋綴 24 冊 〔明正徳 8 年
(1513)〕刊 * 明銅活字版 |
| 6、栄花物語 袋綴 9 冊 〔江戸前期〕刊
* 絵入抄出本 | 13、続世継(今鏡) 袋綴 10 冊 天保 13 年(1842)
合歡園刊 |
| 7、新訳栄華物語 洋装 3 冊 金尾文淵堂
大正 3～4 年(1914～5)刊 | 凡例 |

I 歴史上の紫式部

1、古事談 源頭兼編 袋綴6巻6冊 嘉永6年(1853)刊 *丹鶴叢書 *勝海舟旧蔵

登録番号、1244217～22。丁字色向かい鶴文様型押し表紙。縦26.2cm×横18.2cm。外題、表紙左肩の単杵白色無地刷題簽(縦18.9cm×横3.7cm)に「丹鶴叢書 〈古事談一(～六)〉」。内題、「丹鶴叢書 癸丑帙／従五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻／古事談第一 〈王道后宮〉(～第六 〈亭宅諸道〉)」。匡郭、縦19.1cm×横15.1cm(四周单边)。柱題「丹鶴叢書」。丁付「一ノ一」のように巻数と丁数を記す。料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。刊記、丁の右半分に「丹鶴城蔵梓」と大書し、その左上段に「売弘所／三都書肆」、下段に「京都三条通升屋町／出雲寺文次郎／大阪心斎橋通久太郎町／河内屋喜兵衛／江戸芝神明前／岡田屋嘉七／同鍛冶橋五郎兵衛町／中屋徳兵衛」。蔵書印、各冊1オ上部中央の余白に楕円の単杵朱陽印「勝安芳」(勝海舟(1823～99)の印)。

丹鶴叢書は紀州藩付家老であった新宮城主の水野忠央(1814～65)が編纂した叢書で、当初は1000巻を目指したというが、154冊で頓挫したようで、現存数が少なく貴重である。弘化4年(1847。丁未)～嘉永6年(1853。癸丑)に刊行され、刊年ごとに帙を分けた。上質の版木を用い、彫刻・摺刷も美しく、校正も厳密に行われた。

『古事談』は鎌倉初期の説話集。上代・中古のさまざまな説話461話を、第一王道后宮、第二臣節、第三僧行、第四勇士、第五神社・仏寺、第六亭宅・諸道に分類する。後世の『続古事談』や『宇治拾遺物語』などに影響を与えた。源頭兼(1160～1215)は故実に詳しく、後鳥羽院には歌才を認められなかったが、藤原定家撰の『新勅撰和歌集』(本展示参考2・12参照)に入集。

掲出したのは第一王道の一条朝の記事。紫式部の父である藤原為時(生没年未詳)は長年、不遇であったが、「苦学の寒夜、紅涙、袖を霑す。除目の春朝、蒼天、眼に在り」という対句に一条天皇(980～1011)が感動し、越前守に任ぜられたという。為時は漢詩文を専門とする儒者で、息子の惟規(生没年未詳)とともに式部省に勤めた。紫式部の「式部」の名もこれにちなむ。

2、俊頼口伝 源俊頼 袋綴上下2冊 [江戸中期]写 *寿永2年顕昭奥書本 *岸本由豆流旧蔵

登録番号、1424084～5。楊梅色雷紋繫地牡丹唐草文様空押表紙(縦29.0×横21.1cm)。表紙左肩斐紙短冊「俊頼口傳 乾(坤)」(本文とは別筆)。見返し、本文共紙。内題「俊頼口傳上(下)」。料紙、楮紙。毎半葉12行、字面高さ、約21.5cm。和歌1首1行書。墨付、131丁。奥書は以下のとおり。

(a)寿永二年八月二日、於紫金臺寺見／合了、依 知足院入道殿下命、為賀陽院、

俊頼朝臣所作々(也の誤)、題家(顯家の誤)朝臣本、号俊秘鈔、

(b)自教懿御僧傳之／智範々(也の誤)、

奥書(a)には署名がないものの、寿永2年(1183)8月2日に、顕昭が仁和寺の院家紫金台寺において『俊頼髓脳』を「見合」した際に記したものと推定されている。同年、顕昭は守覚法親王の命を受け、5月に『拾遺抄注』を、7月に『後拾遺抄注』を、8月に『詞華集注』『金葉集抄』(佚書)『堀河百首注』(佚書)を、10月に『散木集注』をそれぞれ注進しているが、『俊頼髓脳』の「見合」は、そうした一連の注釈作業の合間に行われた。守覚のもとには俊頼自筆本を含む2部の『俊頼髓脳』があったことがその蔵書目録(前田綱紀編『桑華書志』)所載「古蹟歌書目録」「第十五 髓脳」から知られている。顕昭は「自筆本」を書写したと思われるが、奥書には明示されていない。

一方奥書(b)からは、「教懿御僧」に伝わった顕昭本が「智範」に相伝したことが窺えるが、「教懿」

「智範」の両僧の伝は未詳で、かつ顕昭とのつながりも不明。「智範」については、承元～天福（1207～1233）頃に醍醐寺（清光坊）に同名の僧がいたことが確認できる（『醍醐寺新要録』等）ものの、同一人物と断定することはできない。

現存する『俊頼髓脳』の伝本は70を超えるが、俊頼自身が幾度となく本文に手を加えたと思われ、内容の繁多、本文の異同が多い。寿永2年の顕昭の奥書を持つ系統本は多く30本ほどが知られて、鶴見大学図書館にも本書とは別にもう一本江戸前期書写本が所蔵される。

各冊巻頭に「岸本家蔵書」「朝田家蔵書」の印を捺す。国学者岸本由豆流（1789-1846）の旧蔵本。

『俊頼髓脳』中には、紫式部の弟惟規の説話が2つ収められている。一つは、斎院選子内親王の女房に逢おうと夜忍び込んだところ、警護の侍たちが発見し、門を閉ざされ、逃げられなくなってしまった時の話。惟規と恋仲にあった女房が選子に事情を話すと、選子は「あれは歌詠む者こそ聞け」と言って赦したという。惟規は去り際に「神垣は木の丸殿にあらねども名のりをせねば人とがめけり」という歌を詠み、選子の歓心を買ったという。

今一つは掲出箇所の惟規の臨終間際の話。父の為時（本書及び寿永2年顕昭奥書本系統諸本は「ためよし」と誤る）に伴って越中国に下向中、にわかに病となり、彼の地で手を尽くすも治癒は難しく、僧は「今は後世のことを思へ」と惟規をさとす。すると惟規は「中有（死後、次の生をうけるまでの間）の旅の空には、嵐にたぐふ紅葉、風にしたがふ尾花などのもとに、松虫、鈴虫の声」は聞こえるかと僧に問う。そんなことをなぜ尋ねるのかと不審がる僧に対して、「それを見てこそ慰めめ」と答える。それを聞いた僧は「もの狂ほし」（常軌を逸している）と言って逃げ帰ってしまう。臨終の間際にも、風雅なものに執心する好士（数奇者）として惟規は描かれている。いよいよ最期を迎え、惟規は「都には恋しき人のあまたあればなほこの旅（この度）は行かん（生かん）とぞ思ふ」という一首を残す（『惟規集』によれば「恋しき人」とは「斎院の中將」。前述の選子内親王づきの女房か）。最後の一文字を書き残して息を引き取ったため、父為時は「ふ」という文字を加きそえ、形見として常に見ては泣き暮らしたと伝える。

《参考文献》

- ・太田晶二郎「『桑華書志』所載「古蹟歌書目録」―「今鏡」著者問題の一徴証など―」（日本学士院紀要 12-3・昭和29年11月）

3、紫式部集 紫式部 袋綴1巻1冊 〔江戸後期〕写 *「家集」10冊のうち

登録番号、1302553（1302548～57のうち）。『紫式部集』は『待賢門院堀河集』・『為子集』・『本院侍従集』と合写。ほかに、小侍従集・馬内侍集・式子内親王集・俊成卿女集・寂蓮集（雑纂本）、等持院殿御集・兼好法師集・小馬命婦集・弁乳母集・紀伊集・二条院讃岐集・相模集・大式集・伊勢大輔集・北院御室御集・源賢集・慶運集・寂念集・持資集・常縁集・成仲集・在良集・清慎公集・忠度集。計28種の私家集を一筆で10冊に書写する。

薄縹色布目表紙。縦26.6cm×横19.1cm。外題、表紙左肩の白題簽（縦19.2cm×横3.7cm）に「家集 〔各家集名を割書〕」と墨書（本文同筆）。内題、各家集冒頭に同筆で記す。料紙、楮紙。見返しと同じ。遊紙なし。毎半葉10行、和歌1行、詞書2字下げ。字高、約21.0cm。『紫式部集』は古本系と定家本系に大別されるが、当該書は定家本系統。尊円親王（1298～1356）筆本を写した旨の本奥書あり。蔵書印、各冊前見返し右下に無粋朱陰方印「棟棠／居」（所蔵者未詳）。

掲出したのは15番歌。姉を喪った紫式部は、同じく妹を喪った人と文通し、宛名に「姉君」・「中の君」（次女）と書きあったという。

4、紫式部日記傍註 壺井義知 袋綴 1 巻 2 冊 〔明治前期〕刊 * 文政 4 年 (1821) 刊の後印

登録番号、0156184～5。水色布目地に富士山・鶴・松原・海の文様を型押しした雲母刷り表紙。縦 26.2cm×横 18.1cm。外題、表紙左肩の単杢白色無地刷題簽（縦 17.8cm×横 4.3cm）に「紫式部日記傍註 上（下）」。内題、「紫式部日記傍註上（下）」。匡郭、縦 20.6cm×横 15.6cm（四周单边）。柱題「紫式部日記傍註序（系譜、上、下、下後補、下後補壺井蔵）」（上に白魚尾）。丁付、横線の下に丁数を記す。料紙、楮紙。見返しも同じ（上巻の前見返しには「壺井義知著 全式冊／紫式部日記傍註」と刷った赤色の紙を貼る）。遊紙なし。刊記、「文政四年（辛巳）十一月補刻／東都書林／売捌所／東京京橋区南伝馬町壹丁目／吉川半七／同 日本橋区通三丁目／林平次郎／大阪南区心斎橋通壹丁目／松村九兵衛」。「東都書林」の下に朱で「東京市京橋区／南伝馬町壹丁目拾八番地／松山堂書店 藤井利八」と刷る。

壺井義知 (1657～1735) は公家の官職や装束について平安期の文献に基づき実証的に研究した。掲出したのは、一条天皇が『源氏物語』の作者は『日本紀』を読んでいるようだとしたこと、紫式部に「日本紀の御局」というあだ名がついた場面、為時は惟規より紫式部の方が漢詩文に通じていたので、紫式部が男子であればと嘆いた場面、また彰子 (988～1074) が『白氏文集』（本展示参考 4 参照）を読みたがり、紫式部がひそかに進講する場面が続く。当時、漢詩文は男性の教養とされていたが、紫式部のように素養のある女性、彰子のように興味をもつ女性もいた。

参考 1、源氏物語 綴葉装 46 巻・目録 1 巻 47 帖 〔江戸前期〕写

登録番号、1440996～1042。空蟬、胡蝶、螢、常夏、篝火、藤袴、藤裏葉、総角、欠。各巻の書写者を鑑定した「目録」1 帖が附属。縹色花菱文様金欄表紙、縦 16.1cm×横 17.7cm。外題、表紙中央の金箔野毛散らし金泥下絵題簽（巻によっては竜紋題簽。縦 11.2cm×横 2.9cm）に各巻名を墨書。見返し、汙繫金紙。料紙、斐紙（巻によっては斐楮交漉）。遊紙、前 1 丁、後は帖により異なる。毎半葉 10 行。和歌は改行して 2～5 字下げで書き、末尾は地の文に続く。字高、約 13.6cm。識語、帯木「万治三年五月日（花押）」、改丁して「右一冊（本院御所）少将局／真跡也依厚望為／後証記之而已／貞享三歳膺月日／柱下菅（花押）」、末摘花「参議藤原嗣章」、濡標「右之一巻依或人所望雖赤面／之至令書写畢／于時／延宝第六初秋 羽林藤定経」、玉鬘「這一帖依或人之懇望染／禿毫者也／林鐘中旬 参議藤原公通」。蔵書印なし。黒漆の桐箆筒入り。蓋の表の右上に「近衛家」、中央に「各親王殿下／諸公卿筆 源氏物語 完」と本文別筆で墨書した紙を糊付け。

「目録」も同装訂。外題「目録」、内題「源氏時代不同筆者目録」。「桐つば 近衛左大臣基熙公」以下、各巻の伝称筆者を記す。最終丁に「源氏物語一部目録之通／銘々御真筆不涉異／論者也外題者／青蓮院宮尊証親王御筆也／応需誌之而已／元禄元（戊辰）年季冬日 古筆了珉〔琴／山〕」。近衛基熙 (1648～1722) は後水尾天皇 (1596～1680) に庇護されて和歌・書・絵・有職故実などに通じ、正徳 6 年 (1716) には『源氏物語』の注釈『一簣抄』74 冊を完成させた。尊証親王 (1651～94) は後水尾院皇子。「目録」の伝称筆者は皇族や公家为中心で、それぞれの官位は元禄元年時点のものと一致し、故人には「古筆」の注が付される。ほとんどが存命者の筆跡鑑定である点が特徴的で、真筆資料と細かく見比べる必要はあるが、一般的な鑑定より信頼性が高い可能性もある。

掲出したのは帯木巻のいわゆる雨夜の品定めの一節。博士の娘は当時の女性としては珍しく漢詩文に通じていたものの、菓として蒜を食べたので「いと臭きにより」対面できないなどと、恋人の前でも平気でデリカシーに欠けた発言をしてしまう。儒者の娘である点は紫式部と同様であり、

自らを戯画化したとも言われる。

5、紫式部日記釈 清水宣昭 袋綴 1 巻 4 冊 明治 23 年 (1890) 刊 * 天保 5 年 (1834) 刊の後印

登録番号、0257989～92。黄檗色布目地若松文様表紙。縦 23.3cm×横 16.2cm。外題、表紙左肩の双杵白色無地刷題簽（縦 16.0cm×横 2.9cm）に「紫式部日記註釋 一（～四）」。「内題、紫式部日記釈一の巻（～四の巻）」。「匡郭、縦 19.4cm×横 14.4cm（四周単辺）。柱題「○紫式部 釈卷一（～四）」。「丁付「○一」、「○序一」などと記す。料紙、楮紙。見返しも同じ（第 1 冊の前見返しには「松の屋藤井大人／清水宣昭大人著述／紫式部日記註釋／東京 光文書房」と記した赤色の紙を貼る）。遊紙なし。鈴木朧による「跋」を冒頭に置く。刊記、「明治二十三年補刻／同五月製本 定価金八十銭／発兌所 京橋区本材木町三丁目／朝陽館／同 同／柏原政次郎」、その左に「弘売書肆」として「吉川半七（京橋区南伝馬町） 敬業社（神田区小川町）／青山清吉（小石川区伝随院前） 鶴巻支店（芝区神明前）／大倉孫兵衛（日本橋通一丁目） 齋藤謙造（下谷区池之端）／目黒支店（京橋区老丁目） 吉田久兵衛（浅草区広小路）」と列記。蔵書印、各冊 1 才右下に単杵朱陽方印「本山／文庫」（本山彦一（1853～1932）の印）。

清水宣昭（1793～1868）は名古屋の豪商の出身で、藤井高尚（1764～1840）の門弟。『紫式部日記釈』は高尚の説などを多く取り入れつつ、俗語訳をも交えた詳しい注釈で、昭和に入っても広く読まれた。高尚は岡山出身の国学者で、本居宣長（1730～1801）の門弟となり、『伊勢物語』『落窪物語』『源氏物語』『古今集』『後撰集』などの平安文学を研究した。『紫式部日記釈』には序を寄せている。

掲出したのは紫式部が「渡殿に寝たる夜」の場面。直前では、藤原道長（966～1028）が『源氏物語』の作者であれば、紫式部もさぞ「好き者」（浮気者）であろうと戯れる歌を作り、紫式部がそれに反論する歌を作った。続くこの場面では、紫式部が寝ている局の「戸をたたく人」がおり、「おそろしさに」無視すると、翌朝、戸を開けなかったことを恨む歌が贈られてきた。紫式部は開けていたら、さぞ後悔したろうという歌を返す。原文に「戸をたたく人」の名は記されないが、『紫式部日記釈』では道長が「けさう」（懸想）したのだと解説し、根拠として『新勅撰集』を挙げる。

参考 2、新勅撰和歌集 藤原定家撰 綴葉装 20 巻 1 帖 永正 7 年 (1510) 写 * 近衛尚通筆

登録番号、1389086。薄茶色地下り藤唐草文様金欄表紙。縦 26.0cm×横 17.4cm。表紙左肩の朱色竜紋題簽（13.2cm×3.0cm）に「新勅撰和歌集」と本文同筆で墨書。見返しは金銀箔を密にまき、霞模様とする。内題、仮名序と各巻冒頭に「新勅撰和歌集（巻第一～二十）」。「1 ウから仮名序を書き始める。料紙、斐紙。毎半葉、序 9 行、本文 10 行、和歌 1 行、詞書約 2 字下げ。字高、約 22.3cm。遊紙、前 1、後 2 丁。10 括り、各枚数は 9・10・10・10・10・10・10・10・10・11（最初と最後の 1 丁は表紙に綴じ込む）。巻末に「此集微臣不顧愚筆書而以授／濃陽国宰畢假塞集之闕者也／抑京極中納言匪啻蒙 綸言／偏依関東武命撰之乎殆以新／古今集為花以当集為実云々／然乃其軀既正風也撰者既独歩也／最足指南者哉／（2 行空白）／永正第七載南呂下旬／（1 行空白）／前関釣叟（花押）」という書写奥書あり。永正 7 年（1510）8 月下旬、近衛尚通（1472～1544）が十三代集ないし二十一代集の欠を補うために該本を書写して美濃国司に贈ったといい、撰者定家は後堀河天皇だけでなく「関東」すなわち鎌倉幕府の「命」も受けて『新勅撰集』を編んだこと、定家は『新古今集』を「花」、『新勅撰集』を「実」と思っていたこと、『新勅撰集』の歌風こそ「正風」で、卓越した定家 1 人の撰であるから「指南」となることを述べる。鎌倉幕府の影響力に注目する点

に特徴があるほか、花実論は連歌師の宗祇（1421～1502）の『百人一首抄』の序に通じる。尚通は政家男で、宗祇から古今伝授を受け、書にも巧みでその書流は「古近衛流」と称される。自筆日記『後法成寺関白記』の影印が『陽明叢書』に収められ、各年の冒頭に記された花押は該本の花押と一致する。もっとも、永正7年8月前後の記事に『新勅撰集』のことは見出せないものの、同年2月8日条には「土岐綿十把、森下十束送之」と記され、美濃守護であった土岐政房（1467～1519）との交流が知られる。「国宰」は国司の意であるが、守護に転用したか。最終丁ウに単杵朱陽方印「月明／莊」。極札、前遊紙オ右上に糊付けされ、裏は見えない。縦16.0cm×横1.9cm。「近衛殿尚通公〈新勅撰和歌集／御奥書御判有〉全部一冊（琴／山）」。二重箱入り。内箱の蓋の表に「近衛殿尚通公御筆／新勅撰和歌集／御奥書并御外題共御同筆」、外箱の蓋の表に「近衛殿尚通公御筆／新勅撰和歌集／御箱書古筆鑑定者 檜山成徳筆」と墨書。檜山成徳は本展示8を参照。

『新勅撰和歌集』は後堀河天皇（1212～34）が貞永元年（1232）に藤原定家（1162～1241）に下命した9番目の勅撰和歌集。完成間近に崩御したため、定家は草稿を焼却する。しかし、前関白の藤原道家（1193～1252）が後堀河院のもとにあった草稿を見付け、再び編纂を命じるとともに100首ほどを除棄するよう求め、文暦2年（1235）に全1374首で成立した。ところが、現存伝本の中にはそれより多い歌をもつもの、つまり除棄されたはずの歌を含むものがある。該本も361番歌の後に「年つもる…」（1375）、「あはれかく…」（1376）の2首の除棄歌をもつ一方、170番歌を欠いて計1375首を有し、宮内庁書陵部蔵（400・10）本に近い。精選の過程を探るうえで貴重な資料といえよう。

掲出したのは5で挙げた贈答歌。たしかに、『新勅撰集』では「夜もすがら」の歌が「法成寺入道前摂政太政大臣」すなわち道長と明記される。しかし、根拠は不明確で、果たしてこれが紫式部の意図どおりなのか、それとも定家の誤解なのか不分明であろう。

6、栄花物語 袋綴40巻・目録系図1巻9冊 〔江戸中期〕刊 * 絵入抄出本

登録番号、1007343～51。薄縹色布目表紙。縦25.9cm×横18.6cm。表紙中央の藍色無地刷題簽（縦19.1cm×横6.9cm）に各巻名を記す。匡郭、本文なし（字面は縦約20.7cm×横約16.0cm）、絵あり（縦20.6cm×横15.8cm。四周単辺）。料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。毎半葉12行。無刊記。巻8末尾に『伊勢物語』や『源氏物語』は世間でもてはやされているが、『栄花物語』は「君臣のよしあしを正しく」記していて「国の宝」とも言うべきであるが、長大なので巻ごとに面白いところや「世のためし」になるところを抜き出し、疑巻や御賀巻などは全部を載せたと記す（掲出箇所）。

『栄花物語』は六国史の後の時代を描く歴史物語。正編30巻と続編10巻から成り、正編の作者は赤染衛門かと言われる。『源氏物語』からも大きな影響を受けている。掲出したのは、初花巻における後一条天皇（1008～36）の誕生の場面で『紫式部日記』を主な資料としている。

7、新訳栄華物語 与謝野晶子 洋装3冊 金尾文淵堂 大正3～4年（1914～5）刊

登録番号、0380194～6。上下巻の箱欠。上巻は大正3年（1914）7月5日印刷、同10日発行、中巻は同年8月18日印刷、同22日発行、下巻は大正4年（1915）3月10日印刷、同15日発行。天金。

与謝野晶子（1878～1942）は歌人としてはもちろん、『新訳源氏物語』『新新訳源氏物語』の著者としても有名だが、ほかにも『紫式部日記』『和泉式部日記』などの現代語訳を手がけた。装訂と

挿絵を担当した中澤弘光（1874～1964）は東京出身の洋画家で、黒田清輝（1866～1924）らに学んで叙情的なロマン主義的画風を確立し、文化功労者となる。晶子と親しく、『新訳源氏物語』をはじめ、数々の歌集の装訂をも担当した。

掲出したのは 6 と同じく初花巻の絵。晶子は「若宮は関白がお抱きして、御剣は小宰相の君が捧持した。虎頭は宮の内侍が持つて御前行をした」と訳す。生まれたての後一条天皇を道長が抱き、父の一条天皇から贈られた守り刀を小宰相の君が持ち、作り物の虎の頭を宮の内侍が持った。この虎の頭を映した湯に新生児を入浴させると魔除けになるという。

8、校正栄花物語系図 檜山成徳 袋綴 1 巻 1 冊 天保 3 年（1832）序刊 * 与謝野鉄幹・晶子旧蔵

登録番号、1358512。表紙、檀紙に金切箔・銀揉箔散らし。縦 25.8cm×横 18.9cm。外題、表紙中央の無柢縹色無地刷題簽（縦 17.4cm×横 3.6cm）に「重修栄花物語系図」。匡郭、序と凡例にのみあり（縦 20.5cm×横 14.6cm。柱題なし）。丁付、丁数のみ記す。料紙、楮紙。見返しも同じ（前見返しには梔子色無地の紙を貼る。後見返しには広告を印刷）。遊紙、前 1 丁、後なし。刊記なし。蔵書印、1 オ右上と最終丁ウ左下に単柢朱陽方印「横山／蔵書」（所蔵者未詳）。前遊紙オ中央、1 オ上部中央に単柢朱陽方印「晶子」（与謝野晶子（1878～1942）の印。本展示 7 参照）、1 オ右下に単柢朱陽方印「采華／莊蔵」（与謝野鉄幹（1873～1935）の印）。

檜山成徳（1774～1842。名は義慎。号は坦斎）は書画に通じて古筆鑑定も得意とした（本展示参考 2 参照）。南北朝時代に作られた『尊卑分脈』という系図には紫式部の注として「御堂関白道長妾云々」と記される。しかし、根拠は不明で断定もされていないうえ、当該資料や次の『勅撰作者部類』などの掲出箇所はそうした注を持たず、紫式部が道長と恋愛関係にあったか判然としない。

参考 3、勅撰作者部類 元盛撰、惟宗光之補 袋綴 1 巻 3 冊 元文 5 年（1740）写 * 源政〔完〕筆

登録番号、1375833～5。灰色無地表紙。縦 26.7cm×横 19.7cm。表紙左肩に「勅撰作者部類 四位已上（五位以下／凡僧以上、女院已下／庶女已上）」と打付書き（本文別筆か）。内題、「女院已下／庶女已上」の冊にのみ「勅撰作者部類」と墨書（本文別筆か）。料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。毎半葉 11 行。字高、約 20.5cm。『新千載集』までの作者を部類する。第 3 冊に「作者異義」を付す。同巻末に元盛と光之の本奥書を記した後、「元文五庚申年七月六日起筆同閏七月朔日／功畢于時七拾有二翁源政〔完〕書之」（「翁」は「歳」、「源」は「〔翁〕」を消して上書き）という書写奥書がある。次の丁に朱の別筆で「〈イ本〉右作者部類三冊者僦林道春先師之御本以謄写焉／然因 貴命模写而奉進献之吁誠本朝公家武家／之歌人浩然在目前而已／寛文二年龍集壬寅 河野春？〔弋＋言〕謹書」、2 行あけてやや小さく朱で「右朱書者異本トノ異同見合ノ序ニ假ニ書入／置而已猶迫而二本ノ正誤ヲ正考ヘテ別ニ謄写シテ／善本トナスヘシ此イ本ハ吉文字屋寺尾光真之本也／安政四丁巳年十二月初旬 葛西一徳」。元文 5 年（1740）に源政〔完〕が書写し、安政 4 年（1857）に葛西一徳が「吉文字屋寺尾光真」の異文を朱で注記したもの（光真本には寛文 2 年（1662）に河野春？〔弋＋言〕が林羅山（1583～1657）の本を謄写したという識語があった）。

『勅撰作者部類』は勅撰歌人の伝記や入集状況などを身分別にまとめた書。建武 4 年（1337）、元盛（1261 年頃～没年未詳）が『古今集』から『続千載集』までの作者を部類し、康安 2 年（1362）に惟宗光之（生没年未詳）が『風雅集』・『新千載集』を増補、さらに正保 3 年（1646）に榊原忠次（1605～65）が残りの 3 集分を『続作者部類』として部類した。元盛は俗名を藤原盛徳といい、元亨 4 年（1324）年以前に出家。二条為世（1250～1338）の門弟で、頼阿（1289～1372）らとの交流

が知られる。「作者異義」も元盛が作者名表記などを考証したもの。

9、栄花物語 綴葉装 40 巻 40 帖 〔江戸前期〕写 * 調度本

登録番号、1307663～702。表紙、紺地に金泥で梅や若松などを描く。縦 23.8cm×横 16.9cm。外題、表紙中央の布目地金泥霞引題簽（縦 14.0cm×横 3.0cm）に「栄花物語第一（巻名）」と墨書。内題なし。料紙、斐紙。見返しも同じ。遊紙、前 1 丁、後は帖により異なる。毎半葉 10 行、和歌 2 行、改行 2 字下げで書き末尾も改行。字高、約 18.6cm。奥書なし。蔵書印なし。

掲出したのは布引の滝巻。白河天皇（1053～1129）の第 1 皇子である敦文親王（1075～77）の誕生 7 日目の祝い。その様子は『紫式部日記』に書いてある後一条天皇の誕生祝いと同様であるから記さないという。

10、栄花物語 袋綴 40 巻・目録并系図 1 巻 21 冊 明暦 2 年（1656）刊

登録番号、1029103～6、1031625～41。丁子色布目地草花文様表紙。縦 19.2cm×横 13.2cm。表紙中央の無柢白色無地刷題簽（縦 12.3cm×横 2.6cm）に各巻名を記す。匡郭、縦 11.6cm×横 8.6cm。柱題、巻数のみを記す。丁付、「〇一」のように丁数を記す。料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。刊記、第 21 冊末に「明暦第二（丙ノ申）季暮秋吉旦ノ洛陽今出川林和泉掾板行」。桐箱入り。

掲出したのは楚王の夢巻。親仁親王の乳母に紫式部の娘の大式三位が選ばれた場面。ここでは祖父の為時の官職にちなんで「紫式部がむすめの越後弁」（左面後ろから 3～4 行目）と呼ばれている。親仁親王（1025～68）は後朱雀天皇（一条天皇と彰子の皇子、道長の孫）と嬉子（道長の娘）の間に生まれ、後に後冷泉天皇となる。大式三位（生没年未詳。名は賢子）は藤原宣孝（？～1001）と紫式部の間に生まれ、はじめは彰子に出仕し、親仁親王の誕生後は乳母となり、後に従三位典侍に至る。藤原兼隆（掲出箇所では「左衛門督」と称される）と結婚して女子を産んだ後、高階成章（990～1058）と再婚し、成章が大宰大式となったため「大式三位」と呼ばれた。

II 伝説化する紫式部

11、源氏表白 卷子装 1 巻 1 軸 〔江戸中期〕写

登録番号、1405502。紺色布目表紙。縦 24.3cm×横 10.5cm。外題・内題なし。見返し、金銀切箔散らし。本文料紙、金泥雲霞引の斐紙に唐草繋ぎや雷文繋ぎなどの模様を刷る。一紙、縦 24.5cm×横 32.5cm。計 10 枚を継ぎ、全長約 325cm。毎紙、7～10 行。字高、約 20.5cm。奥書なし。蔵書印なし。本文の漢字には墨で、最後の巻名一覧には朱でふりがなを付し、本文を含めて巻名にはすべて朱の合点を付す。

仏教の五戒のひとつに嘘を戒める「不妄語戒」がある。フィクションである『源氏物語』も一種の嘘と見なされ、平安後期ころから紫式部はその罪によって地獄に堕ちたという伝承が生まれた。『源氏表白』は紫式部を供養する際に用いられたもので、桐壺から夢浮橋までの各巻名を織り込んだ文章で世の無常を説く。伝本の中には安居院の聖覚（1167～1235）作と記すものもあるが、根拠は不明である。聖覚は説法に優れた澄憲（1126～1203）の子で、父と同じく唱導を得意とした。

12、新勅撰和歌集 藤原定家撰 綴葉装 10 巻 1 帖（巻 1～10 存） 〔鎌倉末期〕写 * 伝後伏見院筆

登録番号、0036013。浅縹色地に瑞雲を織り出した金欄表紙。縦 23.5cm×横 15.4cm。外題なし。内題、仮名序冒頭と各巻頭に「新勅撰和謌集（巻第一～十）」（本文同筆）。見返し、銀箔を密にまく。料紙、斐紙。毎半葉 9 行、和歌 2 行（上句末で改行）、詞書約 2 字下げ。字高、約 21.3cm。10 括り（各枚数 7・7・8・8・8・8・8・8・8・4。最初と最後の 1 丁は表紙に綴じ込む）。遊紙、前 1 丁、後 5 丁。46 番歌は詞書と作者名を記し、歌の 2 行分を擦り消す。616 詞書～627 詞書途中「衣裏」まで 11 首分脱葉（第 10 括の冒頭に当たる）。最終丁ウに単杵朱陽方印「月明荘」。また「墨付百四拾まい有」と本文別筆で墨書した紙片を糊付け。桐箱入り。箱の蓋の表中央に「新勅撰（ママ）〈上後 臥 見院御筆〉」と本文別筆（糊付けされた紙片とも別筆か）で書写。

掲出したのは 602 番歌。紫式部のために「結縁経供養」をしたときに藤原宗家（1139～89）が『法華経』の菓草喩品の内容を詠んだ和歌。雨が草の大小を問わず平等に降るように、仏も悟りの程度を問わず衆生を平等に恵むと説く。宗家は紫式部のための供養ではあるが、その「ゆかり」（縁）として自分も「法の雨」に濡れたい、すなわち仏の恵みを受けたいと詠む。

参考 4、白氏長慶集 白居易 袋綴 71 巻・目録 2 巻 24 冊 〔明正徳 8 年（1513）〕刊 *明銅活字版

登録番号、1000965～88。紺地金揉箔散らし表紙。縦 25.9cm×横 17.2cm。近代の改装で、天地と背を若干切断、本文に間紙を入れ、前後 2 丁ずつ遊紙（見返しと同じ紙）を補う。外題なし。内題「白氏長慶集」（巻によって「白氏文集」）。匡郭、縦 19.1cm×横 13.1cm（上下单边、左右双边）。柱題「白氏文集」（上に黒魚尾。魚尾の上に「蘭雪堂」）。下に魚尾はなく、横線を引く。尾題「白氏文集」（巻によって「白氏長慶集」）。毎半葉 16 行（界線によって 8 行に分け、各行 2 行で記す）。1 行 16 字。巻首に元稹（779～831）の序、巻尾に陶穀（903～70）の「龍門重修白樂天影堂記」を置く。ともに木版（整版）であるが、本文は銅活字版。最終冊最終丁オの末尾 2 行と裏半葉は欠（後述のように刊記があった部分）。蔵書印、第 1 冊 1 オの右下から単杵朱陽方印「汪士鐘／読書」（汪士鐘は清中期の蔵書家）、単杵朱陽方印「吳／寛」、無杵朱陰方印「趙／洞」、無杵朱陰方印「太／琛」、単杵朱陽円印「汪」。また右上 2.4cm 四方の料紙は切り取られる。3 オ右下に単杵朱陽方印「建之／蔵書」。なお、「趙洞」「汪士鐘読書」印は奇数冊の同じ位置にある。右上の切り取りは全冊にあり、第 8 冊は最終丁ウ左上も切り取られる。第 9 冊 1 オ右上に単杵朱陰方印「醒老」、その左の 2.4cm 四方が切り取られる。全体に墨、朱、青墨の傍点があり、往々に欄外の頭書として考勘が記される。いずれも中国人によるものと思われる。

該書は非常に伝本が少なく、現在、日本では本学にしか所蔵されていない。『北京図書館古籍善本書目』所掲の「白氏長慶集七十一巻目録二巻〈唐白居易撰 明正徳八年華堅蘭雪堂銅活字印本二十四冊（下略）〉」と同版で、同本の刊記には「正徳癸酉歲錫山蘭雪堂華堅活字銅板印行」と記されている。この中国国家図書館（旧北京図書館）蔵本、台湾国家図書館蔵本と比較し、本学図書館蔵本がもっとも早く刷られ、なおかつもっとも脱落の少ない善本と言える（表野和江「明・銅活字本『白氏長慶集』について—鶴見大学所蔵の漢籍—」鶴見日本文学会報 87・88、2021 年 3 月）。無錫華氏は銅活字版で有名で、華堅も『白氏長慶集』を皮切りに『元氏長慶集』『蔡中郎文集』『芸文類聚』等を続けて刊行した。

『白氏文集』は中唐の白居易（772～846。字は楽天）の詩文集。もともととは親友の元稹が長慶 4 年（824）に『白氏長慶集』50 巻を編纂し、後に『後集』20 巻、『続後集』5 巻が増補されて計 75

巻となったが、『続後集』4巻は早くに散佚した。日本には白居易在世中に伝来し、『源氏物語』をはじめとする古典文学に絶大な影響を与えた。南宋の時代に詩を先に配列しなおした「先詩後筆」本が作られ、該本もその形式である。

掲出したのは巻71「香山寺白氏洛中集」。左面の最後から3行目「我に本願有り、願はくは今生世俗文字の業・狂言綺語の過ちを以て、転じて将来世世讃仏乗の因・転法輪の縁と為さん」が有名。仏教では仏教と無関係の文学作品が「狂言綺語」と見なされるが、白居易はそれらも仏の教えに通じると主張した。この考え方が日本でも受け入れられ、13『続世継（今鏡）』などにおける紫式部評へとつながる。

13、続世継（今鏡） 袋綴 10巻 10冊 天保13年（1842）合歓園刊

登録番号、1444455～64。鼠色竜胆丸文空押表紙（縦25.7×横18.0cm）。表紙左肩刷題簽「続よつき（続世継） 一（～十）」。見返し、本文共紙。各冊巻頭に目録を置く（第1冊は総目録）。目録題「続世継第幾」。料紙、楮紙。毎半葉11行、1行22字に木活字を組む。墨付き（含目録）、(1)36丁、(2)33丁、(3)27丁、(4)30丁、(5)34丁、(6)46丁、(7)30丁、(8)25丁、(9)20丁、(10)21丁。刊記は以下のとおり。

(a)慶安三年孟春 中野道伴刊行

(b)天保一三年水無月 合歓園活版

(a)は慶安三年（1650）に京都の書誌中野道伴が『続世継』を刊行した際に付された刊記。ここから本書は慶安3年刊本を底本とした重刊本であることがわかる。本来であれば出版の規制に触れるところであるが、近世後期の木活字版にはこのような例が散見する。(b)の「合歓園」は不明。文化13年（1816）に連歌書『菟玖波之栞』を著した渡邊章（上野東照宮の社家、文政8年〈1825〉に隠居）が同じ号を用いるがやや時代が合わないか。なお、本書と装丁、版式、活字を同じくするものに刊年不明の『賀茂翁家集』がある（『近世木活字続貂』）。また、誤植訂正三丁（「活版続世継跋」とあり）を付した版も報告されている（『近世活字版目録』）が、本書には見られない。

『今鏡』を「続世継」と称することは、「世継物語」とも呼ぶ『大鏡』の続編の意。第68代後一条天皇から第80代高倉天皇の146年間の歴史を紀伝体で記す。『大鏡』の語り部「大宅世継」の孫で、紫式部に仕えた「あやめ」という女房を母とする143歳の老女から話を聞くという形式をとる。編者には大原三寂の一人、寂超（藤原為経・1115頃～生没年未詳）が有力視されている。

本書「うちぎき第十」「作り物語の行方」に、狂言綺語を弄んだ『源氏物語』を著したため、紫式部は「後の世の煙」（焦熱地獄）に苦しんでいるのではないかという問に、媼は、『白氏文集』「七十巻の巻物作りて、言葉をいろへ、譬ひをとりて、人の心を（仏道に）勧めた」白居易が実は文殊師利菩薩の化身であった。紫式部も「ただ人にはおはせぬ」に違いないと擁護する。

《参考文献》

- ・『日本文学大辞典』（藤村作編・昭和9年・新潮社）＊『菟玖波之栞』の項目は福井久蔵が執筆。
- ・『近世活字版目録』（日本書誌学大系50・平成2年10月・青裳堂書店）
- ・『近世木活字続貂』（日本書誌学大系90-1～2・平成22年4-5月・青裳堂書店）
- ・太田晶二郎「『桑華書志』所載「古蹟歌書目録」―「今鏡」著者問題の一徴証など」（日本学士院紀要12-3・昭和29年11月）
- ・海野泰男『今鏡全釈』（昭和58年7月・福武書店）

凡 例

1. 書目一覧は、原則として書名、著者名、装訂、巻冊数、刊写年（刊写者）の順で記し、特記事項は「*」以降にまとめた。
2. 編著者が未詳の場合は、著者名欄を省略した。また、『源氏物語』の著者名も省略した。
3. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
4. 推定記載は〔 〕、小字双行注は〈 〉に括り、2 字以上の踊字は「／＼」、改行は「／」または「/」とし、丁の変わり目には「」を付した。
5. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例)「もみぢの賀」→「紅葉賀」
6. 漢字は通行の字体に統一した。
7. 古典本文の引用は断らない限り『新編日本古典文学全集』により、表記は改めた。歌番号は『新編国歌大観』によった。
8. 解題執筆の際には、本学で開催された過去の展示解題のほか、以下の展示図録を参照した。
 - ・『藝林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』（1986 年）
 - ・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』（1989 年）
 - ・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（1994 年）
 - ・『学校法人総持学園創立 80 周年記念和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書 80 選』（2004 年）

展 示 担 当

表紙（ポスター）、2・13 の解題：伊倉史人（ドキュメンテーション学科）

上記以外の解題：田口暢之（日本文学科）

第 162 回 鶴見大学図書館 源氏物語研究所 貴重書展

紫式部 ―史実と伝説―

発行日：2025 年 1 月 21 日

編集・発行：鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2 丁目 1-3